同和問題（道徳）学習指導案

平成３年６月２５日（火）第５校時
板野中学校　３年Ｅ組
男子19名，女子18名　計37名
指導者　　阿部憲作

１　主　題　誇りうる生き方を求めて

２　主題設定の理由

同和問題を語るとは，私自身が部落差別とかかわってどう生きてきたのかを語ることであり，子どもたちと共に人間として生きることの意味を求めることだと考える。昨年本校に赴任し，どれだけ被差別の立場に立って同和問題を語れるかが問われ，また，人間としての真価が問われているんだという気持ちでいっぱいであった。しかし，Ａさんが「はっきりいって先生も私は疑っている。口先だけって感じがしたからだ。きれいごとなんかいらないから自分の本当に思っていることを聞かせてほしい。」と生活ノートに書き，また，昨年行なわれた全体授業の後，「私はこんなに苦しんでいるのに，言えない，手があがらない。･･･みんなに伝えたかった。部落って言うのがどんなものかを･･･。情けない。」と書いてきた。これは私自身が被差別の立場に立って同和問題が語れていなかったことであり，Ａさんの言いたいことが言える仲間づくりができなかった私の責任である。まさに，私は差別者であり，子どもたちを苦しめてきた。

３年生Ｅ組を担任することになった時，Ａさんを苦しめていたのは私自身であることに気付かせてくれたＡさんのやさしさをエネルギーにし，「丸岡忠雄さんの言葉である『お前だったら，俺の一番底にある部分が全部さらけ出せる。』そんな学級の仲間でありたい。人間でありたい。」と語り，最終学年のスタートをきった。

本学級には体育館で行なわれた全体授業で「自分は部落出身です」とはっきり部落宣言をしたＢさんがいる。授業後のＢさんの感想文には「これでスッキリしました。もう何も隠すことはありません。あとはもうれつに差別に立ち向かっていくだけです。････Ｃ君も部落出身であることを打ち明けました。私はあんな勇気のある友だちがいてとても幸せです。････これからどんな差別が待ち構えているか分かりません。でも，Ｃ君やまわりの人たちと一緒に差別に負けずにがんばっていきたいです。」と書いてきた。私は体が熱くなった。部落差別と闘い，こんなにも必死に生きているすばらしい子どもたちを前にして，この子どもたちを決して苦しめてはいけない，悲しませてはならない，そう誓った。学級の子どもたちも「Ｃ君やＢさんは自分が部落の人だと言ったのは，ぼくたちを信頼していることだから，ぼくたちもその気持ちにこたえてがんばっていかなくてはいけないと思います。」「熱くなる

という言葉がぼくの心に今日はっきりと感じられた。今までの自分とは全くかけ離れた気持ちになったような気もした。‥‥なんか今までの自分が情けなく思えた。」と応えている。Bさんや C君の言葉が，学級の子どもたちに感動を与え，生き方を変えようとしている。高め合おうとしている。しかしながら，「私には言う勇気がありません。やっぱりみんなの目があるし，こわいという気持ちがいつも勝ってしまって自分の心が開けないままいままでずっとこのままです。」「ぼくは部落だけどみんなの前で言ったことがありません。なんか，そのことを言ってしまうとまわりのみんなから差別されるんじやないかなって思ってしまうんです。」と書いてきた子どもたちがいる。また，「みんなの前では言えないけど，このまま隠し続けるのもいやだし，隠しても分かることだし，自分の気も苦しいし，いつか言わないとだめだと思うから，早く言えるようにもっと勉強して，自分の出身を言えるようになりたいです。」と書いた子どもがいる。まだまだ苦しんでいる子どもたちが目の前にいる。この子どもたちの苦しみは私の苦しみであり，一人一人の子どもたちみんなの苦しみでありたいと願う。

資料「同和教育への希い」は，丸岡忠雄さんが厳しい部落差別のなかを生きてきた生きざまそのものが書かれ，また，部落差別と闘って生きてきた丸岡さんの強さ，やさしさに貫かれていることがわかる。

丸岡さんが高州に生まれ育ってきたなかでの意識，それは誰に教えられたというのでなく，生命を守るために本能のように「ふるさと」を「かくす」ことを覚えた部落差別の歴史そのものである。その丸岡さんが「ふるさと」を「かくす」ことから「名のる」ことへと自己を変革させたものは丸岡さんの人間としての強さであり，同時にやさしさであると考える。それは，部落の人たちが冷酷な部落差別のなかを懸命に生きてきたという真実を知って，「歎くことよりも怒ることだ!!」と訴えたことであり，その「怒り」のなかに，人間として差別を絶対に許さないという丸岡さんの生き方が感じられる。その生き方が仲間をひき寄せ，共に差別と闘う絶対的な信頼関係を築いていったと考える。

丸岡さんの生き方は，人間は変わっていけるものだということを教えてくれる。それは，部落の人たちを苦しめてきたのは，部落差別の苦しみがわからない，わかろうとしない人間であり，このことは人間性の喪失である。同時に丸岡さんの生き方は，本当の人間の強さとやさしさに貫かれた生き方であり，その生き方そのものは本当の人間の誇りうる生き方である。私たちは，私たちが差別をしてきた丸岡さんから，人間は変わりうるということを教えてくれる。そして，変わっていくべき人間はまさに差別する側の人間であり，本当の人間の誇りうる生き方を求め続けることを私たちに訴えている。今まさに目の前にいる子どもたちが，部落出身であることを言えなくしているのは，私たち自身の責任である。そのために，私たちがいかに被差別の側に立てるかが問われている。「私は，部落の友と共に部落差別と闘いながら生きていきます。」と言える子どもたちを育てたい。そして，子どもたち一人一

人が絶対的な信頼関係に支えられ，丸岡さんのように人間として共に部落差別と闘う誇りうる生き方をしてほしいと願い，本主題を設定した。

3　ねらい

丸岡さんの誇りうる生き方に共感させ，部落差別は絶対的に差別する側の　責任であることを理解させると共に，部落差別に憤りを持たせる。さらに部　落差別解消に取り組む絶対的な信頼関係を築き，部落差別解消に立ち上がる　子どもを育てる。

4　視点　　人権と差別

5　指導計画

（1）　常時指導　　学級目標「熱と光と」を合言葉に，人間として熱く生きる，学級の一人一人が輝いている，人間が尊重されることを学級の思想になるよう，語りかけ，対話をし，互いに高め合う学級集団を作りたい。

（2）　関連的指導　道徳　　「峠」

「大きな喪失に絶えてのみ　新しい世界が開ける」人間は変わっていくものだということを理解し，よりすばらしい現在の自分であり続けようとする態度を育てたい。

（3）　核心的指導　道徳「自分以下を求める心」……２時間

道徳「同和教育への希い」……６時間（本時5/6）

（4）　発展としての関連指導

学活「すばらしい生き方に学ぶ」

これまでの同和問題学習を通して，部落の人たちのすばらしい生き方から何を学んだか，また，自分は同和問題とかかわってどう生きるのかを話し合い，さらに，部落差別解消に向けて自分は何をすべきかを考え，実践する態度を養いたい。

（5）　常時指導（発展）

部落問題を自分の問題としてとらえ，部落問題学習を通して自分を高めていく態度を身につけさせたい。さらに家庭・地域社会において部落差別解消に取り組む実践力まで高めたい。

6　本時の指導

（1）　目　標

丸岡さんの誇りうる生き方に共感し，部落差別に憤りを持たせ，仲間と共に部落差別の解消に自ら取り組む意欲と態度を育てる。

（2）　展　開

学習活動	主な発問と期待される生徒の反応	指導上の留意点
1「同和教育への希い」を読んでわかったことや思ったことを話し合う。	○「同和教育への希い」全体を通して，心に残ったことは何か。 ・丸岡さんが，「ふるさと」を「かくす」ことから「名のる」ことへと変わっていったことはすばらしい。 ・部落差別のなかを，懸命に生きてきた部落の人たちの生き方がよくわかる。 ・部落差別の解消のためには心から信じ合える仲間をつくっていかなければならない。 ○「ふるさと」を「かくす」ことから「名のる」ことへと丸岡さんを変えたものは何だったのか。 ・部落差別の正体がわかったから ・部落に生まれたことが恥ずかしいのでなく，恥ずかしがることが恥ずかしいんだということがわかったから。	・できるだけ多くの生徒に発表させる。 ・丸岡さんの生き方に触れ，共感したことや心に残った言葉を話し合わせる。 ・真実を知ったことと真実を知って「黙くよりも怒ることだ!!」という怒りが，丸岡さんを変えるエネルギーになったことを理解すると同時に，多くの信頼し合える仲間の支えが

	・多くの信頼し合える仲間との出会いがあったから。 ○「何でも信じ合い，話し合える仲間をつくっていく」ために，自分はどんな生き方をしようと思うか。 ・自分の差別心を洗い，自分が差別してきたことをあやまりたい。 ・被差別の立場に立ち，部落の友の悲しみを自分の悲しみとして，訴えていきたい。 ・自分の本音を語り，仲間の輪を広げていく。 ○「他人の痛みがわかるということは，同和教育の最も大切な部分と思う。」と言う丸岡さんの思いについてどう思うか。 ・人間が人間として生きていくなかで，最も大切にされなければならないことだと訴えている。 ・人間が幸福に生きるために誰もが身につけていかなければならないことだ。 ・民主的な世の中をつくる基本だ	あったことに気付かせる。 ・互いに腹の底にある本当の思いを語り合うことにより，信頼の絆ができることに理解させ，仲間の輪を広げていくために自分を語る生き方をとらえさせたい。 ・他人の痛みがわかるということが，人間として幸福に生きる源であることを理解させる ・同和問題は，私たち一人一人の問題であることに気付かせる。
２丸岡さんの生き方を通して，部落問題にかかわってどう生きるのかを話し合う	○今，部落問題に向き合ってどのような生き方をしようと思うか。 ・丸岡さんのように，部落差別と闘う誇りうる生き方がしたい。 ・仲間と支え合いながら，部落差別の解消につながる生き方がしたい。 ・部落の友と共に，部落差別を背負って生きたい。	・今，部落問題に向き合って，どのような生き方をするのか，どのような生き方がすばらしいのかを語らせる。

T_1　始めようか。

HK男　起立、礼、着席。

T_2　それでは、昨日丸岡さんの生の声、君たちに贈るメッセージということで、テープを聞きました。それで最後の方にものすごく先生の気持ちをとらえている言葉なんですが、こういうことを言われたのを覚えていますか。「生きるのが下手であってもかまわない。真実をしかと見つめる勇気をもつのだ。真実をしかと見つめる勇気をもつのだ。」この授業、今までに昨年から一年間と四、五、六月と学んできたことを全部だしきって、一つのけじめにしたいと思います。思ったことや考えたことをどんどん発表してほしいと思うんです。それではこの「同和教育への希い」を今まで十時間くらいかけてやってきたかな。先生の方がほとんど話をしてきて申し訳ないと思っているんですが、今日はこの全体を通して一番心に残ったこと。丸岡さんの生き方で心に残ったことを最初に言ってほしいと思います。手を挙げて発表してください。

MS男　ぼくが一番不合理に思ったのは、「許婚に去られた友がいた」というところで、自分たちが好きで結婚する約束までしているのに、別に家と家が結婚するわけでもないのに、家の差が違い過ぎるとか言って結婚ができなくなるのはおかしいと思いました。

T_3　全体学習のとき、誰かが同じような発言をしていたね。君たちの中から、友達の中から同じようなことがでてきたね。丸岡さんの生きてきた中に、「ふるさとをあばかれい死した友がいたふるさとを告白し許婚に去られた友がいた」君たちの現実に生きる社会にもあるね。

YY女　私もMS君と同じで、その男の人と女の人が愛し合って、それで婚約したのに、それなのにどっちかが部落出身とかで親が勝手にその二人の間を引き裂くのは、なんかとても腹がたつ。

T_4　腹がたつな。とても厳しい現実が今までにもあったし、今でもあるわけですね。そのことに腹がたちますね。

TM女　「被差別部落に生まれたということで、お前は高州だろうと、いやな表現で言われた体験はない。それでは差別を受けなかったのかというと、そうではない。私はやはり厳しい差別の中にいたんだということを改めて思う。」というところで、私もだいぶん前に言ったと思うんだけど、１年生の時に、ある友達が「うちのお母さんはあっちの、部落の子とは遊んだらいかんって言うた」っていうのを聞いて、今まで私自身は差別とか出会ったことがなかったから、改めてやっぱり自分の身近なところにも差別があるんだなあって思って、丸岡さんと同じだなあって思いました。

T_5　身近なところに差別の現実をみたっていうことだね。丸岡さんの言っていることがよくわかるということですね。

KN男　べつに、憲法とかで人権というものが守られていると思うけど、被差別部落に生まれ

たということが、生まれついたという感じで、差別されることになっていて、憲法では人権が守られているのに、被差別部落ではまだ守られてないし、まだこの世の中には不平等なことがたくさんあると思いました。

T_6　ちょっと「同和教育への希い」から離れて、人権ということについて言ってくれました。もう少し具体的にＭＳ君やＴＭさんが言ってくれたように、この資料にそって言って欲しいんですが。

ＨＫ男　丸岡さんは被差別部落に生まれたけど、誇らしく生きているし、ぼくはまだ差別を受けたことがないし、逃げたことはないけど、差別は絶対にいけないことだし、許したらいけないことだと思います。

T_6　はい、他にどうですか。あてられるのと自分から進んで手を挙げるのとだいぶん意味が違うね。瞳をあげて胸をはろう。

ＭＳ男　さっきＨＫ君が言ったんだけど、丸岡さん自身は差別をあまり受けなかったんじゃなくて、眼に見えるような差別は受けてなくて、だけど、眼に見えないところで差別を受けていたんだと思います。

T_7　先生は、ＨＫ君は差別をあまり受けてなかったというのは自分のことを言ったように聞いたんだけど、ＨＫ君どうですか。

ＨＫ男　自分のことです。

T_8　丸岡さん自身はＴＭさんが言ってくれたように、眼に見えなかっただけで、小さい頃から部落差別の中にいたとはっきり言っているね。

ＨＯ男　一番心に残った言葉は丸岡さんの「歎くよりも怒ることだ」ということです。ぼくはこの言葉を聞いた時は、丸岡さんが、部落差別の真実がわかって部落差別と闘う姿が眼に浮かびました。ぼくが部落差別を知った時は、完全に差別から逃げていて、部落のことについては一つも口には出しませんでした。

T_9　今のはＨＯ君自身のことだね。自分を語ってくれました。真実を知って歎くよりも怒ることだと、丸岡さんは変わってきました。この「ふるさと」の詩にもあるように、けもののような鋭さでふるさとを隠していた。けれども最後には「これが私のふるさとです」というふうに堂々と自分のふるさとを名のるようになりました。その丸岡さんを変えたものは何だったと思うか、聞かせて欲しい。

ＲＵ女　潤間先生との出会いが変えたと思うけど、やっぱり真実を知って自分の心が強くなったんだと思います。やっぱり自分の心が弱かったら隠し通すと思います。真実を知ることによって丸岡さんの心が強くなったから名のることができたんだと思います。

ＭＳ男　ぼくもＲＵさんと同じで、潤間先生との出会いと自分から進んで部落のことを知っていこうとした丸岡さんの努力だと思います。丸岡さんは二十歳ぐらいになるまで、自分は部落出身なのに部落のことを一つも知らなくて、それを知ったから部落差別の本質と

いうのがわかって、ふるさとを隠さずに堂々と名のれるようになったんだと思います。

TM女　私もRUさんやMS君と同じで自分自身が強くなったから言えるようになったと思うんだけど、やっぱり自分が強くなっても周りの人とかがなんとも思っていなかったら、途中で挫折とかすると思うから、自分を支えてくれる仲間とか、心が通じ合える仲間が増えたから、やっぱり一人でがんばるよりみんなでこの問題を考えていくことができる仲間がいたから言えるようになったんだと思います。

YM女　私はRUさんとMS君とよく似てるんだけど、やっぱり潤間先生との出会いで、真実を知ることによって歎くよりも怒ることだと、自分を自分で変えることができたんだと思います。

T_{10}　自分を自分で変えることができた。それをRUさんは強さと言った。丸岡さんの強さ、潤間先生との出会い、いろんな人との出会いがあった。「駱駝」の仲間であるとか、原さんとの出会い、いろんな人との出会いがあったね。それと丸岡さん自身の強さ、それが丸岡さんを変えた。それでいいですか。

NK男　さっきみんなが言ったのとよく似てるけど、仲間と出会うということで、その出会った仲間からたくさんのことを学び影響を受けたから、差別の本当の意味というのがわかって、なぜ自分たちが差別をされなければいけないのか、その間違いに気付き、そして仲間に支えられてはじめて差別と闘うことができたんだと思います。

T_{11}　みんなに付け加えて真実を知ったということかな。本当のことがわかった、部落差別の正体がわかったということだね。少し話が戻るけど、さっき言ってくれたHO君自身は、前は自分自身を語れなかったね。何が君を変えたのかな。聞かせてくれませんか。

HO男　家族です。部落のことについてお母さんと話したんだけど、ぼくが「今、部落のことを他の人に言えるで」って聞いたら「まだこわいけん言えん」って言って、何度も言おうとしたそうだけど、差別されるようで、それですごくそんなお母さんがかわいそうになってきて、部落差別に対する怒りがこみ上げてきました。

T_{12}　HO君今言ってくれたけど、とっても明るいお母さんです。家庭訪問行ったり、ちょくちょく会ったら話するんですが、ものすごく明るいお母さんです。そのお母さんをしいたげる部落差別を絶対に許さない。その怒りがHO君を支えているんですね。

YY女　私もお母さんに部落のことについて話したことがあるんですけど、うちは私が生まれる前によそから引っ越してきて、それで私が学習会に行っている意味っていうのをお母さんは知っとんかどうか確かめとうなって、それでお母さんに学習会ってどうしてあるんかわかるんって聞いたら、お母さんは知らんっちゅうて、あたしがここは部落やけん私は学習会行っきょんよって言うて、お母さんは別に何も感じなかったみたいで、それで部落についてどう思うって聞いたら、別に何も思わんって言うて、どうしてって私が問い詰めていったら、なんか部落っていうのは昔の人が自分やの都合のええように作っ

ていって、それでこんなふうに部落が残されてきたんだけど、昔のことにこだわるんじゃなくて、今は今やけん部落は関係ないんちがうんってお母さんが言ってくれて、それで私はお母さんの意見を聞いて、部落について批判みたいなものをもっている人もおるっていうのを聞いて、他の人のお父さんとかお母さんとかは、部落外の人とかだったら、「あそこには遊びに行ったらあかん」とか言うけんど、うちのお母さんやは、部落外に住んでおっても、私にはそんなこと絶対に言わんけんって言ってくれて、すごい安心した経験があります。

T_{13}　ＹＹさん自身の自分の経験から話をしてくれました。部落外の人は自分らの地域に遊びに行かれんと言うけれど、お母さんはどんな人でも友達として、優しく、仲よくしなさいよと言ってくれたということですね。今の意見どうですか。

ＴＭ女　私のお母さんも友達と仲よくしいよって言うけれど、いざ結婚となったら部落外の人と結婚したら、いろいろつらいめに合うから・・・お母さんは・・・私のことをすごく心配してくれているから・・・私がつらいめに合うのがつらいと言うから・・・やっぱりいざ結婚になったら私が苦労するから、部落の人と結婚したほうがいいって言うし、だけど・・・私はそういう考え方は逃げているように思うんで・・・こういう考え方はなくしていかなければいけないと思いました。

T_{14}　今、涙を流しながら一生懸命言ってくれました。ＴＭさんの思いっていうのは感想文とかでずっと前から知っとんたんです。それで、どうかなあって思っていたんですが、今みんなの前で語ってくれました。みんなが真剣に考えてくれているから言えるんですよ。しっかり目を開いて聞いてくださいよ。ＴＭさん、ＹＹさん、ＨＯ君が言ってる意味です。それを自分のこととしてきちっとうけとめていきたいと思うんですね。次の発問にもなると思うけど、今３人が言ってくれた。一人や二人、三人だけにしたら絶対あかん。いいね。みなこの三Ｅの仲間として、今の三人の意見をどうとらえますか。みんな一人一人変わってきたと思うんです。ＹＹさん自身もみんなの前で自分が部落出身であるということをね。この間の全体学習のときは涙を流してしまったね。今までは涙を流さなかったけどね。あれは友達が前で一生懸命訴えている。その姿を見て同じ涙を流したんだね。ＨＯ君やってそうです。先々週の授業の時だったね。先生は前からよく見えた。目から涙がこぼれんばかりに一生懸命目を見開いてね。先生聞いてくれっていう目でね。みんなも聞いてくれっていう目です。君たちが同じ三Ｅの仲間として三年全体の仲間として、どのように応えていくのか、ということを今発表してください。

ＭＳ男　ぼくは・・・最も苦しいことが言える・・・みんなをすごく尊敬しています。

T_{15}　先生も尊敬しています。丸岡さんが言えたのはいつですか。大人になってからだったね。

ＮＮ女　私も三人の子のように勇気のある人間になりたいけど、なかなかなれない自分が本当

に恥ずかしいです。

ＭＳ女　三人の人たちは私達のことを本当に信頼して自分たちのことを語ってくれたんだから、私達はその信頼を裏切らないようにがんばっていきたいです。

Ｔ16　丸岡忠雄さんの生き方を「同和教育への希い」を通してみんなで考えてきました。丸岡さんが今、この教室の中にいるんじゃないですか。負けそうになりながらも一生懸命訴えて、その生き方についてどう思う。そして今、仲間としてどういうふうにしていくのか、それを考えてみてください。何が丸岡さんを苦しめていったのだろうか。今のままでいいだろうか。言わなければ伝わらないよ。

ＫＮ男　丸岡さんを、被差別部落に生まれたことを苦しめてきたのは、ただ何も言わずに周りから見ている傍観者っていうか、ただだまって周りから見ている人たちがいるから、その人たちが何を考えているかも伝わらないし、そういう恐怖感というものでもないかもしれないけど、そういう気持ちが生まれてきても、自分が被差別の立場に立たされていると思っている人は、自分が差別されているんだと思ってもおかしくはないんじゃないかなって思います。

Ｔ17　ＫＭ君の言っていることわかるでしょう。すばらしい３人の仲間に応えてみんなはどういうふうにしようと思うか、今聞かせてください。今日このままでは終われないと思います。一人ひとりの思いを聞かせてください。

ＫＮ女　丸岡さんのように差別されてきて、被差別部落の人たちを苦しめてきたのは、丸岡さんの中に苦しい荷物のような重い重い部落差別を背負わされていて、それは丸岡さんの責任ではなく、荷物になっている人がいて、けれどどのような生き方をしていったらいいのかわからなかったと思うけど、だんだんと真実を知っていき方がわかってきて、自分がこれでいけるんだという自信がついてきて、部落出身だと語れるようになってきたと思います。

ＫＭ女　ＫＮ君が言ってくれたんだけど、傍観者になりたくないから私も訴え続けていきたいです。

ＫＩ女　私たちを心から信頼して言ってくれたんだから、私もその信頼に応えて生きていきたいと思います。

Ｔ18　今、心が動いていると思います。その動いているものを出してください。また今度では遅いと思う。

ＨＴ男　３人の信頼に応えてがんばっていきたいと思います。けれどぼくにはまだまだ勇気がたりないと思います。

ＴＮ男　ＨＯ君たちに応えれるようにしっかり勉強していきたいと思います。

ＨＯ男　まだ、勇気がたりなくて自分で手を挙げたりできないので、もっと勇気をつけて自分に嘘をつかないように生きていきたいです。

ＫＴ女　ＴＭさんたちの涙を流させないようにわたしたちが支えていかないけないと思います。

T_{19}　そうだ。絶対に涙を流させたらいかん。勇気と言うけれども差別者の勇気と差別を受ける側の勇気とでは先生は全然違うと思う。自分が部落出身であることを言おうか言うまいかずっと迷い苦しみ続けてきたわけですね。

ＹＯ女　前の公開授業のときに、ＹＹさんが「自分は部落出身です。」と言ったんだけど、そのとき涙を流したことに少し抵抗があったんだけど、今日は何も抵抗を感じませんでした。

ＹＴ女　私は逃げているっていうか、発表しないことが私たちを信じて自分のことを言ってくれている子に申し訳ないし、やっぱりその信頼に応えるために、私たちも自分の気持ちを自分から言っていきたいと思います。

ＴＳ男　ぼくもみんなの信頼に応えられるようになっていきたいです。

T_{20}　応えるためにはどうしていくの。

ＴＳ男　発表していきます。

ＨＨ男　一人ひとりが本音を出し合って、そのことによって信頼し合っていきたい。

ＴＹ男　ぼくにはまだ発表する勇気がないから、もっと勉強してＨＯ君たちを支えていかなければいけないと思います。

ＨＵ男　ぼくは部落出身の友とつき合っても何とも思わないけど、部落の友は部落差別を背負わされて重苦しいものを感じていると思うんです。今の社会は部落出身というだけで、結婚も反対されたり就職も思うような職業に就けないことがあったりして、とても間違った世の中だと思います。だからぼくたちはもっともっと部落問題を勉強していってＨＯ君たちがぼくたちを信頼してくれるように、ぼくたちもＨＯ君たちを支え、信頼し合えるようにならなければならないと思います。

ＫＳ男　ぼくたちは信頼されているんだから、ぼくたちはそれを裏切らないように自分の意見を出し合って、同和問題に真剣に取り組む態度で示さなければならないと思います。

ＭＭ女　私は私たちを信頼してくれて部落出身を打ち明けてくれた友だちを、絶対に自分が差別することによって失いたくないので、傍観者には絶対になりたくないです。

ＹＴ女　３人が私たちを信頼してくれていることがとてもうれしかったから、発表することによってその信頼に応えていきたいと思います。

ＥＳ女　３人の人たちは自分の苦しみや自分の部落差別との関わりを言ってくれて、私は、また、部落差別のことが前より自分のこととして考えられるようになりました。私は３Ｅのみんなが仲間として支え合えるように、私もその仲間の一人として部落差別と闘える人間になりたいと思います。

ＫＩ男　心を開いて自分の意見を言っていきたい。そして、信用してくれる人の信頼に応えていきたい。

KN男　まだこの問題に関わって悲しんだりしている人がいるので、その人たちの気持ちになれるようにもっと勉強していきたいと思います。

HK男　HO君たちと同じように自分の心に嘘をつかずに、これからも同和問題の勉強に取り組んでいきたいと思います。

KN男　今日も自分から進んで自分の意見を言えなかった。けれど、みんなが自分のことを信頼してくれても、今の時点ではその信頼に応えられていないし、けれど、自分なりに真剣に考えているし、HO君たちのように重たい発言があったら、真剣に考えすぎて逆に何も言えなくなってしまいます。けれど、今のままじゃいけないし、友だちが発表したらそれにすぐ応えられるようになりたいです。

T_{21}　はい、真剣に考えれば考えるほど、手が重たくなるんだね。

YM女　みんな誰にも苦しみがあって、その苦しみが分かち合えるようになったら、それが本当の仲間だと思います。そして、その本当の仲間になれるように努力していきたいです。

HO女　何人かの人が自分の苦しいことを言ってくれたと思います。私はその苦しみを自分の心から絶対離さないように心にしっかり受け止めて、これから二度と友だちが苦しまないようにわたしたちみんながその苦しみを受け止めたらいいと思います。

T_{22}　たった一人っきりというものほどつらいものはない。一人より二人、3人4人というふうにな、仲間が増えるほど部落問題に関わってな、仲間が増えるほどもっと道が開けて来ると思うな。丸岡さんも言っているように、同和問題を解決する大変大きな力になる、それは仲間だと言ってます。今日の授業で一人ひとりの中に課題が残ったと思う。もちろん先生にも。今日で終わったわけじゃない。またみんなでがんばっていきたいと思います。ひとまず終わります。

【資料】

同和教育の希い

丸岡　忠雄

詩『ふるさと』について

“ふるさとをかくす”ことを
父は
けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ
縊死した友がいた
ふるさとを告白し
許婚者に去られた友がいた

吾子よ
お前には
胸はってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ　何のためらいもなく
“これが私のふるさとです”と名のらせたい

昭和４年、世界中が大不況の年、山口県光市の高州、 200戸ばかりの被差別部落に私は生まれた。高州は、真っ白い砂浜に緑の松原、風光明媚なところ。しかし、徳川時代から、この里に住まわされた人々は、この美しい自然とは裏腹に、大変厳しい条件のもとで生きてきた。

真っ白い砂浜では、地引き網で漁もできる。すぐ北側には美しい田圃が並んでいる。それでいて、徳川の時代には、東と西の両部落（この部落とは被差別部落ではない）では、漁船を持って漁に出ているのに、高州には一隻の舟もなかった。

私の部落は、高州（たかす）と書く。その名の通りもともとは川の河口にできた州である。真っ白い砂とは、作物のできにくいところ、そこに住居がある。きれいだけど、自然環境の厳しいところに、最も不況のどん底のとき、10人兄妹の９番目に生まれた。８人、男兄弟がいて、私は七男、弟が一人いる。

厳しい条件と、貧しい生活の中で育ったけれど、昭和４年生まれだから小学校に入学したのは昭和11年。小学校時代を振り返ってみて、小学校１年から６年まで先生や友だちから、部落差別にかかわって何かいやな思いをさせられたことは、一度もなかった。例えば、「橋のない川」（住井すえ）に出てくる孝二たちみたいな、「破戒」（島崎藤村）に出てくる話のような、そんな思いをさせられたことはない。被差別部落の生まれだということで、お前は高州だろう。いやな表現で言われた体験はない。それでは差別を受けなかったのかというとそうではない。私は、

やはり厳しい差別の中にいたんだということを改めて思う。

その一つ一つを申し上げながら、差別が単に言葉で言わないから、何か特別なことをしないから、差別をしていないんだということには、ならないことをわかっていただきたい。

小学校１年生から自分が部落（被差別部落）の生まれなんて知っているはずはない。どのような時期に、どのような機会で、自分が部落の生まれであるかを知るか。それはいろいろであるが、私は小学校５年のとき、私の友人が教えてくれた。

「おい、丸岡、知っとるか。この高州というのはなあ、よそと違うんぞ。」

「よそと違うとはどういうことだ。」

「いや、おれもよく知らんけど、大人が話していた。実は、この高州はこれなんだよ。」

指４本を出して、おれたちは、これだ。だから違うんだと、指４本出して説明はしてくれたんだが、それがどういう意味なのか、その友だちも知らない。

家に帰って母に聞いてみた。

母は、小学校１年生の途中で目を患って、それがきっかけとなり、家も貧しかったため学校へ行けなかった。片仮名がやっと書けるぐらいの力しかない。母は、学問はなかったけど、私の部落では、「やり手ばあさん」なんでもできるやり手のおばさんと言われ、わからないことは、何を聞いてもきちんと教えてくれる母であった。

私は、母に指４本のことを聞いてみた。母は形相を変えた。日頃、母にあまり叱られた経験はない。その叱らない母が、指４本のことを聞いたとき、顔色を変えた。

「そんなこと言うもんじゃない。」

まるっきり違う剣幕に恐れをなして、このことは口にしてはいけないんだということはわかったけど、なぜ口にしてはいけないのかということについては全然わからない。何にもわからないけど、そのことについては言ってはいけないんだということだけがわかった。

５年生の子どもでも、そう言えば、あのことかなと、子どもなりに思い当たる節があった。なぜか理由はよくわからないが、私は高州に生まれたということが、なにかとても恥ずかしいことのように思っていた。恥ずかしいと思う内容はいろいろあった。例えば、当時貧しかったのは高州の子どもたちだけではなかったけど、他の地区の子は貧しくても学校へだけは来た。高州の子は全く来ない。また、両親がどこか遠くへ商売に行ったきり、まったく帰って来ない家というのは、高州以外にはない。他の地区では、冬になると温泉に湯治に出かける親がいる。高州には湯治に出かける親はいないけど、５月のお祭りがすむと、両親が全部出てしまって、子どもだけになるという家がいくらもある。私の家では、両親は家にいたけど、百姓しようにも、３反ばかりの小作で、家族全部がそれだけで食べていくことができない。したがって、百姓仕事のない時は、母は毎晩のように、草履を作っていた。そして、日中は、竹で編んだ籠を天秤で肩に担いで、２里も３里も離れたところへ、ボロ買いに出かけた。

他の地区では、貧しい友だちはいるけど、草履を作っても売るという家はない。どんなに貧しくてもボロ買いに行く家はない。子ども心に、母が「学校へ行って、お母ちゃんが草履を作って

いることを言われんよ。」という言葉が、不思議に響いて腑に落ちない。草履作りと言ったら、すぐ思い出すのが、当時修身で習っていた二宮金次郎の「柴借り、縄ない、わらじをつくり、親の手助け、弟を世話し。」修身で習う草履作りは、孝行の手本であるのに、「どうして言ってはならないのかな。」と思った。きれいな鼻緒の竹の皮の草履、それを作って売ることがどうして恥ずかしいのかわからなかった。（それは私の母だけでなく、部落の親たちの重要な内職であった。）

また、10人兄弟の一番上の兄、親と子ほど年が違っていた。その兄のことで母は、いつも私に言い聞かせていたことがある。

「お兄ちゃんが肉屋していることを言うんじゃないよ。」

兄が刑務所にでも入っているとか、悪いことをしていることを言うなというのならわかるけど、肉屋をしていることを言うなということの意味がわからなかった。

小学校を卒業して、すぐに門司（現在の北九州市）に奉公に出て、苦労して結婚して、宮崎県の都城で店を持たせてもらって、立派に頑張っている兄のことを言うなということの意味がわからなかった。

肉屋、靴屋などは、今でこそ、どなたでもしているが、当時は部落の人が圧倒的に多かった。

そうしたことから、なぜ言ってはいけないのかわからないまま、いけないのだという思いだけが胸の中にたまってきたような思いがする。

５年生のとき、何も教えてもらえなかったけど、その意味がわからなかったけど、何かあのことにつながっているんだということを子ども心に悟っていった。教えてくれたんじゃない。獣のような鋭さで部落は隠さなければならないこと、恥ずかしいことなんだと感じていった。

だれかが教えてくれたのではない。本能のように隠すということを覚えていった。

小学校５年のとき、私を大変かわいがってくれた先生が、友だちと二人で放課後、習字を教えてくれた。天神さまへ奉納するための習字を書くためにわざわざ残して練習させてくれた。

その席のこと、「丸岡君、それはそれと一番上のお兄さんはどこにおるのかね。」と先生が尋ねられた。「はい、兄は宮崎の都城におります。」そして、「何をしよるんかね」と聞かれる。私は即座に「店をしています。」と答えた。先生は、そのことを調べて、記録にするために聞かれたのではない。雑談の中で他の事務をしながら、「何をしよるんかね。」と聞かれただけなのに、母がいつも私に「肉屋をしていることを言うんじゃないよ。」と言い聞かせていた。でも、私を残して習字を教えてくれる先生に嘘を言ってはいけないという思いがある。

先生に嘘を言ってはいけないという思いと肉屋をしていることを言ってはいけないという思い、その思いが重なり合って、先生の「何の店かね。」という問いに、「あの、食料品を売っております。」と言った覚えがある。このなんでもないこと、ごく小さいこと、一週間たったらとっくに忘れてしまうこと、それがあの時、肉屋と言えないで食料品を売る店と言っている。誰が教えたっていうのでもないのに、どうしてあんな悲しい知恵が私についてしまったんだろう。そう思った。「そういうときはこういうもんだよ。」と兄が私に教えてくれたわけでもない。母が教えて

くれたのでもない。誰にも教えてもらってなくても、そのことずばりを言えないで子供心に懸命に考えた末が、肉屋を食料品屋と言っている。なぜそう言わなければならないのか何もわからない。子供の時、わからないということ、どうしても納得いかないこと、でも、それが中学生になり、高校、大学に行き、学問が進むようになるにつれてわかるようになる。「ああ、あれはこういうことだったのか。」「ああそうか。」というようにわかってくる。ところが部落問題だけは逆だった。知恵がつくにつれ、社会的に視野が広がるにつれてわからなくなる。どうしてそうなのか。小学生の時、小さな問題であったはずなのだが、中学生になると、「丸岡、お前のうちはどこだ。」こう言われることがどうにも耐えがたいぐらいいやになった。最も嘘の通用しない相手というのは同級生だった。だからふるさとを高州だと言えばよい。しかし、その嘘の通用しない相手にでも高州と言えない。私の詩の中に高州という言葉が、どんなに重たいかということを書いた詩がある。

《ふるさと》

いちばん　なつかしいことば
いちばん　おもたいことば
いちど
いきを　ととのえたうえで
やっという

ふるさとの名
タ・カ・ス

その思いを詩に書いてみた。一度息をととのえないと出てこない、ふるさとの重さ。でも私が部落の中に住んで、そこから学校へ通っている間は、まだそれほど重たいものではなかった。本当にこれがやりきれないほど、重たいものになったのは、ふるさとを出て一人になった時である。

昭和19年、戦争も終わりに近づいていた頃だったが、神国日本は負けるはずがない。必ず勝つんだ。そういうことを信じさせられていた。その19年は、私は旧制の中学２年生だった。友人たちもたくさん少年兵として戦争に行き、予科練に入り、皆学校を出て行った。小さい体であったが、私も兵隊になろうと思った。中学２年から受けることのできる昔の幼年学校（昔の陸軍の将校を養成する所）、軍の幹部養成としてエリート教育するための徹底した英才教育のなされた学校であり、少年たちのあこがれの的ような学校があった。

私は光中学校一期生（光市人口５万、現在新日本製鉄、武田薬品等の工場は戦時中、海軍工廠〔弾丸・魚雷、人間魚雷回天〕のあった所）、海軍工廠の設置に伴ってできた県立中学校の一期生であった。19年にその幼年学校を受けて合格、熊本へ行った。約30人受けてたった一人合格した。当時の幼年学校の競争倍率は25倍から30倍であった。

昭和57年の夏、その時の光中学校の校長先生を招いて同窓会を開いた。校長先生は覚えていてくれて「丸岡、元気か。」と声をかけてくださった。その先生の言葉に涙が出た。40年たつのに

担任でもない校長先生が出会うなり、「丸岡、元気か。」と言ってくださる。熊本の幼年学校に向かう時、「青柳の世にさきがけて咲きにけり」という句をくださったことを申し上げたら、「そうだったかな。」と笑って言われた。この句の中に初めて合格してくれたという喜びが含まれている。そんな気持ちで熊本に行った時、どんなに有頂天になっていたか。それが熊本に住んでいてしばらく生活するうちに、私を愕然とさせることがあった。熊本の街に部落がある。これは本当に驚いた。驚きというより、恐ろしくなった。私は当時の知識や考えの中で、高州のような所、私が住んでいる所、私の親戚のある所だけに部落はあると思っていた。日本中に部落があるなんて全然思いもしなかった。

部落はなぜあるのか。そのことをきちんと教えられていたら、熊本に部落があるということは、行く前からわかっていた。あたり前なのだ。そのあたり前のことが私にとって思いもかけないショッキングなことであった。生徒たちが日本中から集まっている。その生徒の中で、東京から来たものはあまりよく知らないけど、関西・中国・九州から来たものは部落のことについて知っている。そういうことが話題になるとしばらく話は続く。その話を聞いていると、ほめた話が全くない。軽蔑した話、恐がる話、汚いという話、悪口ばかりである。軽蔑、恐れ、嫌悪、そんな話題が出た時、私はどうしたらよいのか。「おい丸岡、お前のところはどうだ。」と言われた時、返事ができない。「そんなこと言うんじゃないよ。同じ日本人で、俺がそうなんだ。」それが言えれば楽なんだが、なんでもないことなのに、でもそれが言えなかった。言えないどころかそんな話が出ると、調子を合わせてしまう。「そうやな、そうやな、うちの方にもあるが、あまり相手にせんほうがいいな。」と必死に応えている。小さな嘘でも言うものじゃない。その嘘をカバーするために、次の嘘を言ってしまう。その嘘をカバーするためにまた次の嘘を重ねる。私は部落と全く関係ない人間だというような素振りを続けた。しかし、そんな話題の出る度に、なんともやりきれない、ひきむしられる思いであった。

《高州　ーわたしのふるさとー》

春には
わかものが　むらを出る
とりわけ　少し上の学校を出たものが　いくにんも出てゆく

ふるさと遠く　ひとりになると
わかもののふところでは
“ふるさと”が急にずっしり重たくなる

“部落”の話など出ると　とたん
息をつめ
ケンメイに　平気を装いながら
ひそかに　ふところをまさぐってみる

みなに調子を合わせるのだが
ふところには　いつしか血がにじんでしまっていたりする

ひきむしろうにも
“たかす”は決して剝ぎとれはしない

また、「かつて」という詩に

異郷に　ひとり　ふるさとを　否む

それがどんなものであるか。それがどんなに重たいか。一人になって初めてわかった。でも私は光中学校の一期生だ。誰もきていない。調子を合わせていようが、私のことを言うものは誰もいない。

昭和20年の３月「おい丸岡、お前の所の光中学校の後輩が二人入ってくるぞ。」と友人が知らせてくれた。軍の学校とはいっても、なんたって子供。ふるさとが懐かしい。親元が懐かしい年頃。先輩は後輩を非常に大切にする学校。後輩が入学してくるということは、飛び上がるほど嬉しいこと。これは誰にでもある感情。ふるさとのものが来たと聞くと、わざわざ訪ねて行ってでも、「よく来たな、お前どこから来たのか。」と懐かしがって手を握り合ってふるさとの思い出を話す。それがふるさと人なんです。ところが、私に浮かんだ思いとは、ふるさとの人に会える飛び上がらんばかりの楽しい思いではなかった。「よわったなあ」と思った。「あのことを知っている子が来なければいいがなあ」と思った。「かつて」という詩がある。

《かつて》

故知らぬ　かげにおびえ
“ふるさと”の重みに息をのみ
異郷に　ひとりいて
ふるさとびととの邂逅を
わたしは蟹のように怖れた

これは私がそうした特異な感情をもって、私が思いすごして、私だけがそういうことを思うんだろうか。ふるさとの人に会うのが恐い。そんなばかげたことを感じるのは私だけだろうか。これは後に部落問題を勉強し、多くの部落の人たちと接するようになって、いく人もの人から、この思いを聞かされて、私だけでないんだということをはっきり思い知らされた。

私には一人の弟がいる。山口県大島の商船学校を出た。今、船乗りで神戸の川崎汽船の機関長をしている。その弟に（昭和33年頃）ト短調という詩集を贈った。２、３年たって神戸にある弟のアパートに行った。机の上の本棚にト短調の詩集がたててあり、私は手に取って見ていた。見ているうちにドキッとした。アッと思った。部落の部の字も書いてない詩集の一番後ろにある奥付を見た時、ギクッとした。『著者丸岡忠雄山口県光市浅江高州』その高州の二文字は墨で塗りつぶされていた。

山口県の高州が低い州であろうと、部落だとわかる可能性がほとんどない神戸なのに、墨を塗っ

た弟の思いがわかる。かつてふるさとの人に会うのが恐かった、あの思いと同じだった。俺だけじゃないんだなと思った。そんなにも重い、そんなにも辛いふるさとであるのに、なぜそうなのかということがまるでわからない。日本人でないのかもしれないと本気で思った。

昭和24年から小学校の教師になった。教師になって数ヶ月たたないうちに教えていた５年生の女の子から授業が終わったすぐ後で、「先生、これ何か知っとるかね。」と言われたことがある。その子が私の顔をニヤニヤ見ながら、指を４本出して私の前に突きつけてきた。私は返事ができなかった。「あっ、先生の顔が赤くなった。」そう言いながらキャッキャッ言いながら外へ出ていった。たったそれだけだった。子供は何の考えもなくちょっと私を試しただけだった。家で聞いたことを今度新しくきた若い先生に言ってみただけだ。

《指》

“センセ　コレナンカシッチョルカネ”
目の前に四本指突き出して
女の子は僕を見てわらっていた

こおるおもいで立ちつくした　一瞬

“ヤア　センセイガアカイカオニナッタ”
女の子の声を背に
かえすことばも知らず
やっと十九の僕は
こぼれそうな泪をこらえて教室を出た

僕にはあまりにはっきりわかるのだ
　この子の家の団欒の席で
　新任の助教のことが夕餉の食卓の話題にのぼり
　大人たちが　その折
　どんなことを子供に教えたか

“センセ　オハヨウ”
その後も　子供は何でもない無邪気な声だが
メスよりもするどく一突き僕を刺した
その子の指の
痛さは
十年経て
昨日のように鮮やかである

無邪気な行為であることはわかっている。何でもないようなことと思えるかもしれない。去年、この話をしたとき、高校３年の息子が「どうしてそれぐらいのことでショックなんかなあ。そんなことなんか笑い飛ばしておけばよいではないか。」と言う。本当にたいしたことではない。でも私はたったそれだけで教師を辞めようと思った。ダメだと思った。

こんな小さなことで、しかも無邪気にやったことがわかっていて、そのことがそんなにショックなのにとても教師はやれない。こんな弱虫じゃ代用教員だといっても教壇に立って人にものを教えようという身なんだ。そして自分のことなんだ。どうして部落があるのかも知らない。日本人でないのかも知れない。そういえば思い当たる節がある。戦時中、光海軍工廠建設のため一番危険な仕事をした人たちは、広島の刑務所から来た人たちと、朝鮮から来た労務者であった。あふれるほどの朝鮮から来た人たちが、高州に住み着いている。戦時中すでに畑のできなくなった私の家にも三組の朝鮮の人がいた。皆いい人だった。日本語もわからない、若い朝鮮の婦人が片言の日本語を話せるようになって、私たちとかかわるようになった。本当にいい人たちであった。高州の人より多い朝鮮の人のことを思い浮かべて、朝鮮の人と先祖が同じなんだろうかと思ったりもした。（意識調査の結果によると、現在なお先祖が違うというのが20％ある）また、これは朝鮮の人に対する差別がいかに根強く存在し、文化的にはむしろ私たちの大先輩であるはずの人たちを、明治以後どんなに差別してきたかという一つの証でもある。

その後師範学校研究科に６ヶ月在学した中で、部落問題だけはきちんと学んでみたい。部落問題だけはきちんと知っておかないと、子供の４本指を出す行為から受けた大きなショックを、乗り越えることはできないと思った。

昭和24年その半年、歴史を教える若い東大の史学科を出たばかりの潤間という先生に出会った。貴重な出会いだとしみじみ思った。その先生との出会いがなかったら、こういう部落の詩は書いていない。こんなに胸張って部落問題とは向き合ってはいない。おそらくうつむいたままで、やはり部落は恥ずかしいこと、部落は隠しておくもの、そういう思いでずっと過ごしたに違いない。「どうして部落ができたのか。つくられたのか。残されたのか。明治の時代には、大正の時代には、……。」20才になって、私は生まれて初めて部落差別の本質を知った。私は真実を知って初めて目の覚める思いがした。歎くことより怒ることだ。これが後に私が、部落についての詩を書くようになったゆえんである。

「なんだ、そんなことだったのか。恥ずかしがることはないじゃないか。」そう思うと猛烈に腹が立ってきた。今度は元気を出して先生をやれる。子どもが指４本突き出してきたとしても、それを笑って受け流していく。あるいは、その子に話してやることだってできるかもしれない。もう前みたいに恐れない。そう思った。それから数ヶ月、結核が再発し、10年間の療養生活で20代全部費やした。療養中、詩の仲間を得て詩を作り、書きためたものをまとめて詩集ト短調を発刊した。その時、その詩集を発行したとき、一番大切なものが欠けていることに気がついた。部落のことについて触れてない。あれほど勇気づけてくれたのに書けてない。頭の中で理解できても、具体的な作品になって目の前に現われるために、もう一歩何かがいる。

療養所の仲間の中で、部落の話が出る。前みたいに気に病んだりはしない。でもそんな友に

「そんなこと言うなよ。俺はそうなんだから。」とは言えない。例えばこういう言い方をする。将棋をしている仲間と、憎まれ口をたたき合いながら「お前、きたない手つかうな。まるで四つみたいな手をつかうな。」と言う。非常に仲のよい友であったがその友に「俺はそうなんだよ。」とは言えない。そういう感じ方でしか、部落をみていない。いくら表面仲がよいように見えても、その部分だけはあかせない。胸が開けない。そのもどかしい思いを磯村英樹氏（詩集「駱駝」の仲間）宛に綿々と綴った手紙を送る。返事が来た。“友のことば”という題で詩集「部落」に入れてある。

「よく話してくれた。いろんな差別問題には口角泡をとばして論じていながら、身近な問題であるこの部落問題に全く無関心であった自分が恥ずかしい。」

磯村さんという人は私を喜ばすために上手を言うことの全くできない人、正直に自分の思いを言うことしかできない人。その人がこの問題に無関心であった自分が恥ずかしいと書きながら、その一番最後のところに「まず身近な問題から取り組まなければならない。若い自分の息子が部落出身の人と恋愛し、誠実に息子を愛してくれるのだったら、私は喜んで息子と力を合わせて周囲の圧迫とたたかうでしょう。」と書いてあった。

今、正直言って私の周りの仲間で「こだわりません。こだわるわけがない。」という仲間をたくさんもっている。でも昭和30年代に、私はこれを聞いて、しかもうその言えない磯村さんから聞いて、こんな友達のいるところだったら何でも言えると思った。私の一番底にある部分、今まで誰にも開いて見せたことのないものを、こんな仲間のいるところだったら、何でも言えると思った。何でも話せると思った。話さなければいけないと思った。

「駱駝」63号に、「指」という作品を出した。部落とすぐわかる作品を初めて書いた。それを編集した磯永英雄が63号のトップに載せた。表紙を開けたところに載った詩、そして磯永さんは「あのレイアウトの意味わかったかね。」と聞かれた。そして私に「あれは十字架だよ。君はそこから逃げてはいけないんだ。君はこのことをうたうんだ。」と言われた。

その時一通の手紙をもらった。「『指』という作品、私が詩の道へ足を踏み込んだのはこのことをふりかざしたかったのにどうしても書けず、あせりだけですのに、あなたが書いてくださったことは嬉しく敬意を表したいと思います。書いてください。私も書きます。」「駱駝」の仲間の中に私以外に部落のものがいた。しかも、そのことを書こうと思って入ってきた。何年もなるのに一行も書けない。「あなた、よく書いてくれました。私も書きますから、一緒に書きましょう。」そういう仲間がいた。それが詩集「部落」を共に著わした真原牧なんです。そして、そういう思いをたたきつけてきたのが「五本目の指を」という詩です。

私が　はじめて恋を知ったのは
二十一の秋
私はかぎりなく彼をしたい
彼はやさしく私をいたわっていたようだった
冬になると
彼の部屋のコタツに火を入れて

私達は話し合った
私が彼のオヨメさんになる日のことを

その夜は　雪がシンシン　しずんでいた……

“春”になったらネ
指切しましょう
私の指がかわいいと言って　からめた指を
二人は永い間大切にしていた

その彼が　私を四本指　だと言い始めたのはいつからだったか
彼のお母さんにあった日から
二人の上に春は来なくなっていた

私には見えないけれど
たしかに指が　四本だという

切れたのは指切した指だろうか
約束を守らなかったのは　私ではなかったのに
私は四本指の娘だという
持って生まれた不幸せだという

私は想った
私は泣いた
　生まれ出た家のひくいのきのこと
　ねこのひたい程の耕地をむさぼる一かたまりの部落民のこと
　血族結婚の末の精神異常者のこと
　若者たちは自暴自棄
　追いかえされた若妻
　テテナシ子

私は死のうと思った
　傷をいやす為に
　ちゃんとした五体になる為に
　私の心の中でプッツリ切られてしまった
　五本目の指を

その指をかえせ
その指をかえせと
うたいながら

傷口はいえないだろう
傷口はいえないだろう
傷つけたものへのいかりとなって
その口はひらくだろう
なお大きく
　深く
いたみながら
うずきながら　　《「五本目の指を」真原　牧》

この思いは、人を愛したことのある人間なら誰にでもわかる思いです。私のどこが違っているというのか。私はこの詩集「部落」を作るときに、息子の手形を押させた。その子がもう中学３年を卒業します。そのとき、三つ上だった子が、高校を卒業する。私は子供が生まれてきた時に、療養生活のため結婚が遅れ、36才にして初めて子供を得た喜びを思いきり表現したいと思った。そして、差別の現実を訴えた詩を「これでもか、これでもか。」と書き続け世に問い続けた。

《吾子誕生》

おおい
ミンナ　見てくれ
りっぱに手足の揃った男の児だぞ
よっく　見てくれ
指も五本だ
欠けてやしないぞ

どっこも違わないんだ。この子たちに決して悲しい思いをさせてはいけない。ふるさとを人前で口にできないような、そんな子供にしてはいけないんだ。部落問題を本気になって学ぶ、そういう姿勢は子供を得て、はっきりしかも強いものとなった。「差別」そんなものまだあるのかという声を聞くことがある。私はその実例をいくらでもあげることができる。詩を書き始めて20年にもなるのに、まだいくらでもその例をあげることができる。

残念ながら、例えば結婚には、厳しいものが残っている。残っているといいながら10年前と20年前と、時代を輪切りにしていくと歴然と違う。そのことは、厳しいものが残っている中でも認める。就職はというと、下松、徳山、光と従業員5000人を超す大工場の林立するど真中にあって、200戸1000人の人口をもつ高州にたった一人の工員もいなかったという事実、この事実を詩に書くことで激しく訴えた。こんなばかなことが厳然と存在している。昭和34年当時、何万という工員を抱えた工場があり、どんな小さな部落にでも一人や二人の工員がいる。そのような状況の時にも高州には一人の工員も、存在しなかったというひどい就職差別があった。

《高州　ーわたしのふるさとー》

また　聞かねばならない

学校の卒業期が近づいたので

　あねえに優秀じゃったのに

　コウバのシケン

　あの子もだめじゃったげな

　やっぱし

ああ

「やっぱし」と

武田薬品　八幡製鉄　日特管　日立　日石　鋼鈑　徳曹

出光　ｅｔｃ　エトセトラ……

ぎっしり並んだ工場地帯

そのどまん中に位置しながら

“たかす”には　たった一人の臨時工さえいない

二百戸の家並がひしめき

　働きざかりの若者がきょうも仕事にあぶれているというのに　　ー1959年作ー

今では何人もいるが、20年前の悪い状態が一度によくなるはずはない。少しずつ少しずつ良くなってきている。そういう状態の中で、特に中高年に不安定な仕事をしている人がたくさんいる。町並みはきれいになり、住宅はたくさん建ち、公共施設も立派なものができて保育園もできて、結婚もできつつあるが、差別の傷を抱え込んで生きているのが私の部落の現状である。

昭和49年、地域の中で若者たちと部落問題を勉強する会を始めた。光市地域部落研30人、約３年間、毎週部落問題を勉強することを始めた。

・自分たち自身の生き方について考えていく。

・自分と部落問題とのかかわりについて考えていく。

・私自身の生きざまを通して考えていく。

・高州の人たちの生き方について学んでいく。

・高州の人たちは何をして生きてきたのかを学んでいく。

私たちは部落差別の現実を具体的に学んでいった。部落の仕事を調査していく中で、なぜか分からないが、５月に部落の親たちが出ていくことの意味がわかってくる。部落の人が地元では稼ぎようがない。地元では子供を養っていくことができない。そうしたことから、たくさんの部落の親が出ていった。部落ではそのことを“上下いき”といっていた。その内容を学んできたとき、声を上げそうになった。恥ずかしいと思っていたことの中に、深い意味のあることを知るようになった。例えば、猿まわし、周防猿まわしの復活。部落の中でさえ、貧しさの差別の象徴のように考えられ、言われ扱われてきた、それが大道芸としてすばらしい内容をもっていることが後になってわかった。

母に「同級生のところにボロ買いにいかんといて、恥ずかしい。」と言った。「何の恥ずかしいことがあろうに、悪いことしているんじゃない。お前も大きくなったらわかるよ。」母はそう言って取り合ってくれなかったけど、その頃の部落は、どういう状態におかれ、その中で人々が何とか生きようとしてどんなにもがき、どんなに懸命になっていたか。その様子を順々と知るにつれて、私はかつて自分が恥ずかしいと思っていたことが恥ずかしい。そう思うようになった。

子供で学校へいかない子がたくさんいる。例えばよそ木のなりものとか、芋とかそんなものとって食べるような子は、高州にはたくさんいる。そういう友が高州にいるということはとても恥ずかしかった。自慢できることではない。悪いことに決まっている。しかし、そうしたときのなり木のものを取ったり学校へ行かない。子供たちの悲しみについてはそばで見ていながらよくわからなかった。部落問題をじっくり学ぶ中で、その時の子供たちの悲しみや、子供をおいて出る親たちの悲しみが改めてわかるようになった。

例えば“上下いき”“猿まわし”のことを書いた「出立」（でだち）長い詩がある

おとうとおかあが
いよいよ　じょうげに行く
けものの臭覚のようにそれをさとった僕は
何といわれようと
その日ばかりは　学校へ行きたくなかった

“きっと沢山みやげ買うてやるけえ”
おかあは　そういって僕をなだめすかし
学校へやろうとするのだけど

出てしまうと
一年近くも　おとうたちは帰ってこない
幼い兄妹とばあちゃんだけの生活なんぞ
想っただけで泣きたくなってしまう

僕は泣きじゃくって登校を拒んだ
〜〜去年も学校に行ってる間に
　ふたりは　旅に出てしまった
　学校から帰ってそれを知った僕は
　無駄とわかっていながら
　泣きながら　駅まではだしで走った

春までの　淋しかった一年を忘れない
みやげなんて要らない　何にも欲しくない

とうとう　おとうの平手がとんだ
それでも　僕は学校へは行かなかった
おとうの目がぬれていたのを覚えている

出立は一日延びただけだった
夏も間近いという頃なのに
僕たち兄妹には
冬のような凍った季節が　またはじまった　《出　立　（でだち）》

これは親たちを上下に送ったそういう人の話を直接聞いて、詩にした作品であるが、その残された子供たちが、例えば学校へ行かない。両親も誰もいなくて子供だけしかいない。そういう家庭がたくさんあった。また、両親がいてさえ学校へ行かない家庭がある。両親がいないので学校へ持って行く金がなくて、食べるものもなくなって、よそのなすび畑でなすびをもぎながら塩をつけて食べたという話を聞いたとき、どうしてその時学校へ行かなかったんだと、そんなこと言えるはずがないと思う。

そういう反論を許さない。厳しいものが存在したということに思い至る。子供が非行に走り、手に負えないようになった。その時にやはりその子供の裏側まで知って、その子供の身になって考えてやらないといけないんだということをこういう問題を学びながら改めて思う。

部落問題を学びながら「同和教育への希い」と題をつけたが、どうあってほしいか、私の体験からどうあってほしいかということを子供たちに伝えてほしい。何よりも本当のことを教えてほしい。それもきちんと、あやふやなことでなくて真実を教えてほしい。

部落が恥ずかしくなくなったのは、部落問題を自分で勉強するようになってからだった。理論としてわかった段階ではまだだめだった。母のことにしても、上下いきにしても、高州の人の悪いと言われる言葉にしても悪いんではない。上下の商売の中で使う隠語が部落の中で使われる。それを子供が真似をする。言葉が悪いのではなく。あれは上下の中で商売するのに必要な大切な手段としてあみだした貴重な言葉であったんだ。改めてそのことを知って言葉の収集をやっている。それだけで会話ができるぐらいに豊富な内容をもっている。恥ずかしいと思ったことも本当の姿を見ると、そうでないんだということがわかる。

徳川時代の差別というけど、山口県に残っている膨大な資料を丹念に調べていくと、それはつくられたということがはっきりわかってくるし、地区外の人にとっては、差別しないということだけども罰せられたという事例が、御仕置き帳にはっきり残っている。本当のことをきちんと学ぶことによって、恥ずかしさなんか存在しない。恥ずかしいのはむしろ、そういうことに身を縮め、卑屈な姿勢でいることが恥ずかしいんだということを公然と胸張って言えるようになった。

次に、何でも信じ合い、話し合える仲間を作っていかなければならないと思う。「お前だったら、絶対、俺の一番恥ずかしい部分が言える。」そういう人をもっているか。そういう人をもっている人は幸せだ。人のよっては妻にだって言えない部分があるかもしれない。でも、お前にだっ

たら俺の一番恥ずかしい部分が言える。一番底にある部分、全部さらけ出せる。そういう信頼し合える仲間を作るということが、この問題を解決していく大変大きな力になる。私は自分が潤間先生に習ったはずなのに、どうして部落のことが書けなかったか。それに近いような作品は書いている。でもはっきりそうだということがなぜ書けないのか。

私は磯村さん、磯永さんや真原という仲間を得て、ありったけのものが書けるようになった。人間は、本当に傷みを味わったものでなければわからないという。しかし、そのものはわからないかもしれないが、わかち合うことは可能だと思う。人間だったら‥‥。本当に悲しんでいる人間と一緒になって腹を立て、一緒になって悲しむことは人間だったらできる。他人の痛みがわかるということは、同和教育の最も大切な部分と思う。

一人一人の人間、その生命の尊さを思う。人間とは掛け替えのない存在だと考える。これは差別問題を考えていくときに、非常に大切な基礎となる。私はどんなにつまらない私であっても、もう一回私に生まれてくることはできない。たとえば知能的に全く恵まれない人、障害を持つ人、それがどんなに重い一生であろうと、たった一回の人生、それを大事にしなくてどうする。それを駄目な人間だからと言って、役に立たないからと言って、その人間に価値がないもののように、いかにも人間としての値打ちが下がっているように言う。

部落問題、差別問題というのは、人権の問題だと言われる。人権無視とは、まさに人間を人間扱いしていない。人間としてあたり前の扱いをしていない。一人前の扱いをしていない。どこも悪くない。本当にその人を愛しているのに、どうして部落だからいけないというのか。学生時代、あんなに一生懸命に勉強して何でもできて働く意欲と能力もあるのに、部落だからということで職をシャットアウトとする。そんなことが許されていいのだろうか。人権を侵している。そのことを許している。見逃している。新しい憲法の侵してはいけない部分、97条に基本的人権の本質が書いてある。

日本国民に保障される基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は過去幾多の試練に耐え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として、これを保障するものだ。

人間は人間として大切にされなければならない。人権とは人類の宝であり、差別はその宝への挑戦なんだ。許されない。人間が人間として大切にされる世の中、私はどういう政治形態になっても、これは一番大切な基本だと思う。そして、私たちの責務は、本当の民主的な世の中をつくることだと思う。本当の民主的な世の中とは、誰もが生きてきてよかったと思える世の中、それをつくること。それが私たちの生きることの意味だと思う。

自分自身のためにしなければならない。子供たちのためにしなければならない。そうしたときに部落問題は、部落の人だけの問題ということは、かりにも言うことはできない。生きがいのある社会にするために、一緒にがんばっていく。それが子供たちへの最大の財産をつくることになっていく。「これが私のふるさとです。」と私の子供も、どなたの子供も、胸張っていえる。そんな社会にしたいと思います。

(1983.2.5.演題「同和教育への希い」ー今なぜ自分自身の問題なのかー)